

平成二十八年神田古本まつり（乾）

土屋 博

一 雑誌「日本一」合本（南北社、大正四年十月創刊號、大正五年一月號の合本）
古書價格三百圓。雑誌「日本一」は、東京商業會議所會頭中野武營を顧問とし、浮田和民、志賀重昂、和田垣謙三の三名を評議員とする総合雑誌なり。「一千万の讀書階級に清新なる娯樂を提供せんとする日本一の慰安者」を旨指せり。

志賀重昂、「根本的改造を要する日本國民」と題する論文に曰く、「今度の大戰争に際して獨逸の強いのが遍く世界に知れ亙つた。・・・獨逸が開戦後間もなく學校其の他で使つてゐた椅子を以て、直ちに列車内に使用することを得たのは、平時に於いて己に戦時の用意をなし、その長さを等しくしたためである」と。第一次世界大戰の初期には獨逸優勢の空氣を反映せり。

二 「文化創造 思想と生活」高木斐川編著（帝國講學堂、大正十二年刊、定價金四圓八拾錢）一六八六頁

古書價格三百圓。思想を哲學、社會、政治、文藝、科學、教育、倫理、宗教の八項目に分ちて詳述す。また、生活を食衣住の知識、保健衛生、日常科學、禮儀と社交、手紙と式辭、趣味と娯樂、法規と書式、學術語と新語の八項目に分ちて詳述す。

昔の人々の常識としたるものを改めて吸収するは愉し。たとへば手紙の留書につきて眺むるに、同輩以上には「草々、惚々、早々、草々頓首、早々不一、不二、不備、不悉、不具、不盡、不乙、以上」は用ゐぬがよく、「頓首、拜具、謹言、敬具、敬白、再拜」こそよけれ、と。また、長上に対する場合、宛名に脇付を付くるが正式の由にて、高貴の人には「閣下、臺下、執事御中、貴下、尊前、玉案下、玉机下」、目上の人には、「侍史、侍曹、函丈」、目下及び同輩には「机下、硯北、梧右、梧下、座下、足下」など付くべしと。

三 「民友社發兌雜誌國民之友全巻 明治新體詩一覽」和田芳英編（吉川實文堂、昭和五十三年刊、非売品）三三八頁

古書價格八百圓。編者（和田氏）より「木村毅先生」宛の獻呈の辭（直筆）あり。雑誌「國民之友」に掲載せられたる新體詩を集大成したる勞作なり。

たとへば、「海嘯つなみの禍に罹れる三陸の民の心を思ひて」（湖處子、明治二十九年七月十一日號所載）は目を引く。「思ひもかけず沖なかに、いとすさまじきものゝ音、すはやとおのおの身を以て、五月の闇をさぐりいで、われは山辺によち着きて、事なかりしと喜びつ、音のしづまる待ちかねて、下りて見れば何ごとぞ、家居は地よりうしなはれ、待てど妻子も歸りこで、わが喚ぶ聲に應ふるは、岸うつ波の音ばかり、そも何事の起り來て、わが上何がなりしかと、志ばしは思ひもわかずして、唯いたつらに佇みつ、夢かと思ふ時の間に、世を隔てたる心地して」云々。

（平成二十九年二月十一日受附）